

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

女神異聞録デビルサバイバー2 with ペルソナ

## 【作者名】

時価ネットこみなと

## 【あらすじ】

ペルソナ4の主人公がデビルサバイバー2の世界にいたら、という  
パラレルワールドのお話。基本原作通りに進み、鳴上悠が主人公で  
す。筆者は投稿初心者なので、駄文になっている可能性があります。こ  
のキャラこんな性格じゃない!」と思う可能性があります。それらを  
踏まえ、鑑賞してください

## Sunday

「ペルソナッ!!」

小一時間前まで観光客で賑わっていた浅草の仙草寺。

あの有名な雷門前には誰もいず、廃墟と化していた。コンクリートでコーティングされた地面は割れ、最新の建築技術で震度7の地震にも耐えうると言われていたビルが傾いていた。

そんな浅草の提灯前では、一人の少年、鳴上悠と複数の狼が戦っていた。

正確に言えば、狼の形をして刃渡り1m弱の西洋刀を持った悪魔『コボルト』。

それに対して鳴上は鉄パイプを手に取り、健闘していた。戦いに慣れているのか、鳴上はコボルト達の攻撃を避けながら一体ずつ確実に倒す。

その時折、鳴上はカードを握り碎くと、鳴上の背後から突然高下駄を履き、白い鉢巻を頭に巻き、黒い長ランを着込んでいる一昔前の番長姿がモチーフにされたペルソナ『イザナギ』が現れた。

「ジオ!!!」

稲妻が鳴上の背後へ襲いかかったコボルトに落ちた。

稲妻に撃たれたコボルトは、漆黒の煙と共に跡形も無く消滅した。数が多すぎる、と鳴上は呟いた。

一年前であれば『特別捜査隊』のメンバーがいて、能力によってサポートをし合っていたが、今は誰もいない。

しかも所持していたペルソナもイザナギのみとなっていた。

鳴上は親と再び暮らしてから久しぶりに召喚したので、理由も分からない。

「ぬわあああああ〜!!クッソー!新田さん! どこだ〜あ…。」

男性の声が聞こえた。

しかし鳴上は声に構うこと無く、残りのコボルトをイザナギの剣で一掃した。

「おわーな、なんだ!」

鳴上が振り向くと、黄色いマフラーに身を包み、鳴上と同じ学校指定である灰色のブレザーを着た男性がいた。

男性は驚いた様子でイザナギの傍にいる鳴上に話しかけた。

「なんなんだそいつは!!あ、悪魔か!」

男性はイザナギに指を差しながら一歩後退りをした。

「悪魔とは失礼な。これはペルソナ、悪魔じゃない。」

鳴上はイザナギを消して、男性に歩み寄る。

「志島君!大丈夫!!」

浅草の仙草寺の入り口から一人の少女が志島の元へ駆け寄ってきた。髪はショートカットで胸は大きく、結構可愛めの少女だった。

「に、新田ちゃん!」

「無事でよかった。…あれ、あなたは確か、春に転校してきた、鳴上くん…」

「新田さん、近づかない方が良い!そいつさっきまで悪魔と一緒に戦っていた!!」

「悪魔?それなら私達もできるはず…」



鳴上は謎の装置から提灯へ視界を移動させると、あの浅草名物の巨大な提灯が消え去っていた。

刹那、黒の雷が発生、そして人間の姿形とした、人間では無いモノが鳴上の前に現れた。

「…!? 志島くんの動画にいた、お化け…!」

「フッフ…… ようやく出られたわ。ああ、長かった。私はハクジヨウシ。貴方たちが封印を解いてくれたのね？ お礼に…殺してやるつか」

白装束の着物を身に纏った白髪の白い肌をした人間ならざる者『ハクジヨウシ』。

ハクジヨウシが現れた瞬間に周りの温度が急激に低下した。鳴上は直感した。こいつは氷結を司る悪魔だと。

「う…あああああつ！ 誰か…誰か助けて！ バケモンだつ！」

志島はハクジヨウシに恐怖を覚え、叫ぶ。完全に腰が抜けた志島はその場に座り込んで、逃げる事もままならない。

対する新田も突然の悪魔襲来に呆気に取られ、冷静な判断が出来ずにいる。

「あら？ 坊やは逃げようとしらないのね…。勇敢なのか…それともただの阿呆かしら？」

鳴上は真面に動けない新田と志島の前に立ち、ハクジヨウシと対面している。

表情を変えず、ただ鉄パイプを構えた。

「そんな玩具で私を倒そうっていつの？ 本当人間って馬鹿ね」

ブフ、とハクジヨウシが魔法を唱える。

それに合わせ鳴上はその場から離れた。鳴上のいた場所には氷の結晶が地面に突き刺さっていた。

鳴上はカードを握り砕いた。

イザナギが出現し、小さな稲妻がハクジヨウシを襲う。

直撃したはずだが、ハクジヨウシへのダメージは小さかった。鳴上は先程も感じていたが、イザナギの力も昔に比べ極端に下がっていた。ジオダインを発動させたはずなのに、威力はジオと変わらない些細（ささい）な攻撃力。

しかし、ここで引いたら二人は死ぬ、と冷静にハクジヨウシと戦闘を続けた。

「貴方…何、その力。悪魔でも無ければ天使でも無い、その力。…まさか噂に聞くペルソナ使いかしら？」

「…名答。ではこちらからも質問だ。お前等こそ、本当に悪魔なのか？」

「正真正銘、本物の悪魔よ。悪魔は初めて見るのかしら、ペルソナ使いさん。」

ハクジヨウシが息を吸い込む。一瞬の隙を見つけた鳴上はイザナギでハクジヨウシを仕留めに掛かった。

しかしハクジヨウシは速かった。吸い込んだ息を吐き出すと、氷の礫（つぶて）が風に乗ってイザナギを襲った。

イザナギのダメージが鳴上にフィードバックされる。額からは血を流れ出した。流れた血が鳴上の右目に流れ込み、鳴上の視界が狭まった。

「君たち…!?なぜここにいるっ…！」

青い髪に鋭い瞳で美人な顔立ちの女性が志島達の前に現れた。女性性は志島と新田の前に立ち、鳴上の激闘を傍観する。

「クッ…」これは、すでに封印が解かれて…！」

女性は唇を噛み締めて悔しそうな表情を浮かべる。謎の機械はハクジヨウシの封印器だということが女性の言葉から推測できる。

「その君、余り無茶をするな！今から私がハクジヨウシの相手をする！その間、君は私の援護に回ってくれ!!」

女性はケータイを取り出して構えると、黒い雷が発生させて西洋の鎧を纏いし妖精、名を『タムリン』という。

タムリンはイザナギを相手しているハクジヨウシの背後を斬りつけた。

二対一に陥ったハクジヨウシは、分が悪いと顔を顰（しか）めた。

「出て来なさい！我が同胞たちよ!!」

ハクジヨウシの呼びかけと共に、コボルトを筆頭とした悪魔が多数召喚され、鳴上達を囲んだ。

「あ、た…助けてくれっ…ば、ばば化け物に囲まれ…?!」

「…甘えるな！君達も『悪魔使い』だろう!?力を貸せ!!」

狼狽えていた志島に一喝する女性。この状況で女性はハクジヨウシを相手するのに手一杯だ。他の悪魔を相手するには手が回らない。

「志島君！召喚アプリを!!」

「…あ、お、おう」と志島は新田の言う通り見覚えの無いアプリを起動させた。

黒い雷が志島たちの目の前に落ちて、一体ずつ悪魔が召喚された。

志島の前には青く丸っこいハニワみたいな『ポルターガイスト』、  
新田の前には小さな少女の背に羽が生えた『ピクシー』がそれぞれ  
召喚された。

「うおおっ!?ほ、本当に出た…!うっ…!けど、やっぱり怖ええ〜っ!」  
「す、凄い…!これが『悪魔召喚アプリ』…!」

自分の悪魔を呼び寄せられたことに自信が付いたのか、志島達はハ  
クジョウシが呼び寄せた悪魔の駆除に当たった。

ハクジョウウキが呼び寄せた悪魔は、ハクジョウウシに比べ弱く、志島  
達でも問題無く倒せるレベルだった。

「なんなのよ、貴方達…人間(エサ)の癖に、さっさと悪魔(わたした  
ち)に喰われなさいよ!!」

タムリンが攻撃の主軸となりイザナギは距離を置いて攻撃魔法で  
攻撃に、ハクジョウウシは防戦一方だった。

「ふっつっつげんじじゃないわよ!!魔力も持たない、悪魔と契約しな  
きゃなんの力も持たない人間風情が、悪魔様に楯突くんじじゃないよ  
!!!」

ハクジョウウシは火事場の馬鹿力で桁違いの魔力を放出した。放出  
された魔力は巨大な氷塊と化して女性の真上に出現した。  
さらに鳴上と女性が逃げられないように、氷の壁が氷塊の大きさに  
合った円状に囲んだ。

咄嗟(とっさ)に女性はタムリンで氷塊を破壊しようとしたが、想  
像以上の魔力で造られた氷塊は傷を付けても、まさに氷山の一角程し  
か破壊できない。

「無駄よ!貴方達はここで死ぬのよ!!」

「…くっ。私もここまで、か」  
「諦めないでください！」

鳴上は女性のすぐそこに立ち、天に浮かぶ氷塊を見上げる。  
カードを砕き、イザナギを召喚させる。

イザナギは造り出した電撃を剣に纏わせ、氷塊のド真ん中を突き刺した。しかし氷塊の重力には逆らえず、徐々にイザナギと共に氷塊が降りて来る。

「うおおおおおおお!!」

イザナギのフィードバックで体中が悲鳴を上げる。  
筋肉の繊維が数本切れ、骨が少し撓（しな）っている感覚が鳴上を襲う。

氷塊に刺さっている剣から電撃が放出され、徐々に氷塊から光が照らされて、まるで巨大な電球のように見える。

「まさか…人間風情が、悪魔の力を借りずに…私を、悪魔を倒そうって  
いつの?!」

「砕けるおおおおお!!!」

イザナギの剣を中心に、氷塊にヒビが広がる。

そしてヒビから電撃が漏れ出し、氷塊は原形を留められ無くなる。  
細かく砕け散った氷塊は、イザナギの電撃を帯びて、美しく地上に舞い降りた。

「ま、まさか、こんな少年如きに…我々が、敗北を……」

ハクジヨウシは力を尽き果たしたのか、散り散りとなってこの世から消えた。

ハクジヨウシが消えたことを確認した鳴上は、緊張の糸が切れたの

かその場で気を失った。

## Sunday

狭かったリムジン型のベルベットルームとは違い、全面ガラス張りに幾何学的な模様をした金属が張り付いている不思議な部屋。

外の景色が下へと流れる所を見ると、これはエレベーターのようだ。

「初めましてお客様。今回お客様達の旅のお供を勤めさせて貰います、エリザベスと申します」

イゴールの付き人も、以前のマーガレットでは無い青い帽子をかぶった銀髪金眼の女の人だった。

どことなくマーガレットに雰囲気や容姿が似ている。

鳴上がエリザベスを見てみると、イゴールが咳払いをして話し始めた。

「本日ここへお呼びしたのは他でも無い。今貴方達の世界で起きている異変について、お話があります」

「異変…何か知っているのか？」

「勿論でございます。しかし、ここで私共が貴方へ異変について御伝えしても意味がありません…。貴方と私の世界の勝手が違いますゆえ、異変の真相は自分の力でお調べください。」

「…一つ聞きたい事がある。俺のペルソナが使えないのも、その異変に関係するの？」

「少なからず関係あります。この異変で、貴方の絆が途切れてしまいました。理由は解りません」

「そう…もう一度初めから、てことか」

「いえ、誤解の無いよう申しますが、切れた絆は再び結ぶ事が可能です…。もう一度絆を修復さえすれば、以前のような力を取り戻せます。

…ああそれと、もう一度絆を他の人と深める事も可能です。」

鳴上の意識が遠ざかる。いや覚醒しているんだ。現実と夢の狭間から、現実に戻るうとしていいる。

「それでは鳴上様。良い旅を心より願っております……」

国会議事堂の地下に存在するジプス東京支局の本拠地。

その中にあるエントランスで、二人の人物が会話をしていた。

「……本気ですか？ 彼等は民間人です」

「そうか。では何故、彼等が召喚アプリを悪用しないと言い切れる？

不安の芽は、早めに摘んでおかねばならない」

「…事実、彼等は私に協力し、K座標の問題を処理しました。アプリを悪用する様子は……」

「迫、人間は力に慣れれば、やがて悪用を始める。…違つか？」

「……………」

「彼等を独房へ移せ。それと、鳴上と言ったか、そのペルソナ使い。彼には念の為手錠を掛けて置け。」

「手錠、ですか？」

「ああ。ペルソナは使役する者の性格を映し出す。君の話を聞く限り、彼は悪人ではなさそうだ。しかし、もしもの場合に備え、彼には手錠を。」

「…わかり、ました」

話が終わると、迫と呼ばれた女性は納得のいかない様子だったが、

渋々と彼等がいる部屋へ足を運んだ。

鳴上が目を覚ますと、そこは見知らぬ部屋だった。

体中が怠く、痛い。イザナギのフィードバックの影響がまだ残っているようだ。

鳴上は重い身体を起こして、現状を確認する。ガチャツと両手首に手錠がされており、鳴上は上手く身動きが出来ない状況となっていた。

左腕に巻いてある時計を確認すると、ハクジョウシと戦闘してから2時間ほど時間が経っていた。

鳴上は一つこの部屋に疑問を抱いた。この部屋には窓が無く、ここがどこなのかまったく分からないのだ。

一つだけある扉も、堅く鍵が掛けられており、開く様子が無い。部屋も薄暗く、ベッドも古くギシギシと五月蠅かった。

天上の片隅には監視目的と思われるカメラも設置されていた。鳴上は一般で言う監禁された状態だ。

数分後、何の前触れも無しに扉が開いた。扉の向こうには日本人に比べて、全てにおいて色素が薄い青年がいた。

灰色の瞳に灰色の髪、そして一見すれば血色の悪い青年の白い肌。青年は扉を閉め、ベッドに座る鳴上に歩み寄る。

「お目覚めのようだな鳴上悠。」

「…おはよう。良い目覚めだったよ。」

鳴上はベッドから立ち上がり、青年と視線を合わせた。

「ふふふ、この状況を理解してないのか？」

「理解している。監禁されているんだろ？それぐらい子供でも分かる事だ」

「ほう。そこまで理解して何故冷静でいられる。」

「抗つても、ここから出られる保証はない。何で監禁されているか理由を知りたいだけだ」

「賢明だな。お前は他の奴とは違うようだ。流星はペルソナ使いと言った所か」

青年は腕を組み、少し嬉しそうに微笑んだ。

「単刀直入に言おう。鳴上、ジプスに協力する気はあるか？」

ジプス？と鳴上は頭にクエスチョンマークを出す。

青年は事細かに内容を伝えた。ここはジプスと言う日本の極秘機関の一室で、大災害に見舞われた際に姿を見せ、活動を開始する組織らしい。現在、この震災の原因を解明している最中で、それには悪魔が関係していると。

「君は世界でも珍しいペルソナ使いだ。…協力をしてくれれば悪いようにはしない。ここに居れば地上のように食料に困らないぞ…」

「そのお誘いは光栄だが、なんだこの手錠は？」

「ああ。それは保険だよ。…君がもしも我々にとって不利益な存在だったら、ここから居なくなってもらおう…」

「…それは遠回しに、ジプスに入らないと殺す、と言っているのか？」

「どうか…想像に任せる…。さあ、どちらを選ぶ？」

鳴上はスツと目を閉じて、冷静に判断をする。条件も悪くない、聞くだけならジプスは正義の味方みたいな存在だ。しかしこの強引で乱暴な交渉を見る限り、ジプスやこの青年の裏には何か隠されている気がする。

だがこの交渉に心しなければ、自分の命も危うい。

「…協力する、しかないだろ。」

鳴上の言葉を聞いた青年はフツと笑った。

「分かれれば良い。今日から君は我々ジプスの仲間だ。私の名前は峰津院大和《ミネツインヤマト》。ジプスの局長を務めている」

「よろしく。」

「その手錠はすぐに外そう。そして今後の君の仕事を伝える。」

そう言い残して大和は部屋から出て、入れ違いに先程共闘した背が高い美人な女性が来た。

その手には手錠の鍵を持っており、鳴上の手錠を手際良く外した。

「どうも。えーっと…」

「迫真琴《サコマコト》だ。君の事は一緒に居た少年達から聞かせて貰ったぞ、鳴上。」

「だから局長は俺の名とペルソナを…」

「ああ。私も疑問に思っていてな。悪魔を召喚したにしては、君は召喚する媒体を君は持っていなかった。」

「…少し質問良いですか？」

「勿論良いぞ。」と真琴は外した手錠を仕舞いこんで、鳴上に目を合わせる。

「その悪魔ってなんですか？ シャドウとは違うものですか？」

「シャドウ…すまん、質問を返すようで悪いが、シャドウとはなんだ？」

「はい。シャドウとは支配権を失ったペルソナを差します。つまり、俺のペルソナが自分の意志とは無関係に暴れたり、行動をしたら、そのペルソナはシャドウとなります。」

「なるほど…。ペルソナの裏の姿、というわけか。」

「そうですね。簡単に言えばそういう事です。で、悪魔とは何ですか

「？」

「悪魔とは、か…君のペルソナが精神の具現化の存在としたら、悪魔は我々と同じ物質で出来ている存在だ。」

「なら悪魔を呼ぶ為の何か条件は？」

「悪魔を召喚するには召喚気を使う」と迫はケータイを取り出し見せる。

ケータイの画面上には悪魔召喚アプリと言う文字が浮かんでいた。

「このアプリを使用する事により、悪魔を使役することが可能だ。君にもできるぞ。」

「誰でも使える…それを乱用する人も出る可能性は…。」

「ないと言い切れない。だから君にはそのケータイを破壊して欲しい。」

「それが局長の言っていた仕事の内容か。」

「そうだ。君には悪魔の駆除とアプリ悪用者の弾圧をしてもらう。」

## Sunday Side N&O

「こい、ヤマトタケルッ！」

肩に掛かるくらいの少し長めの髪に、男性用スーツを着用した女性が一人、戦っていた。

彼女がカードを砕くと同時に白と黒の魔法陣を形成し、無数の敵を葬った。

彼女が相手にしているのは、一年前まで毎日のように戦っていたシャドウとは違う、明らかに異質なモノだった。

シャドウは負の感情しか持ち合わせていないのに対して、現在相手にしているモノは、人間に似た感情を持っていた。

人ならざるその風貌に喜怒哀楽の感情をそれぞれ持ち合わせている異形なモノ達。

人は、それを悪魔と呼んだ。

「ハア、ハア、こっちは、これで、全部だ」

彼女は肩で息をしながら歩みを続ける。

ここは名古屋の中心街。先程の起きた大地震によってこの名古屋も見るも無惨な姿となっていた。

怒り、悲しみ、憎しみ、恐怖。

この町の溢れ出す負の感情が増幅する。それは詰まるところ、悪魔の餌を垂れ流しているに過ぎないことを、誰も気づいていない。

「くそ、何でこんなじゃっ……」

彼女はとある猟奇的連続殺人事件の捜査協力のため、愛知県警察本部長の依頼のもと、この名古屋へと出向いた矢先だった。

名古屋警察署の栗木刑事に会うため、この名古屋駅前に着いた瞬

間、あの地震が起きた。

地震発生してから数十分後には、既にあの悪魔が町中に沸き溢れ、人々を襲った。

正義感が強いためか、彼女は出会った悪魔を全て消滅させ続けたが、それも限界に近かった。

ふと、彼女の頭の中で、ある男性を思い起こした。

彼はどんな困難でも諦めず、誰かのために戦い、そしてどんな人をも受け入れる。その彼は、彼女が憧れている鳴上悠という少年だった。

「流石に、先輩のように巧く戦えませんか……今頃先輩も、戦っているのでしょうか」

……諦めるには、まだ早い」

そう言って、彼女はまた悪魔に襲われている人を助けるために、またカードを砕いた。

時同じくして大阪。

崩壊した大阪城の瓦礫の山の上に、一人の人間がいた。

「まったく、まだ修行中だというのに、なんだったんだ、あの地震は？ 東京にいる美鶴とは連絡も途絶えて、しかもシャドウモドキが町中を徘徊。修行には最高な状況だが、一般的に見れば最悪な状況だな」

赤いマントを身に纏い、赤のオープンフィンガーグローブを腕に装

着し、服の上からも分かるその鍛え上げられた身体。

「大規模な災害に引き続いてシャドウモドキの出現……まさかまた、誰かがシャドウの実験を？」

彼の頭の中では、4年前に駆け巡った戦いの日々が思い起こされた。

タルタロスでの探索、仲間との出会い、満月の激闘、親友と後輩の死。沢山のことを経験し、それと共に大切なものを沢山失ったあの一年間。

その日々を送る発端となったのが、とある大財閥の実験の失敗、そして、あの男の狂った思想が原因だった。

自分たちの力を利用され、一時世界の終末を迎えそうになったが、巖戸台の心強い仲間達がいたお陰で、最悪の事態は避けられた。

それに続く人によるシャドウの実験が再び行われたのか、と彼は推測した。

突然、彼を狙ってか、何体もの悪魔が瓦礫の中から沸く。

「ふっ。だがこの感じ、影時間とそっくりだ」

不適な笑みを浮かべた彼は、悪魔との戦闘に集中した。

纏っていたマントを脱ぎ捨てる。彼の身体は幾つもの傷があり、その中でも胸元に、三つの牙に引き裂かれたような傷跡があった。

そして、右腰付近に銀色に輝く銃があった。

「俺を楽しませてくれよ。シャドウモドキ……」

## Sunday

「ニカイア、ってあの死に顔動画の？」

迫真琴から悪魔の召喚について詳しくレクチャーを受けていると、ごく最近聞いたことがある単語が出てきたので、鳴上は思わず言葉を発した。

「知っているのか。なら、話が早い。そのサイトに登録した者の中で一部の人間が、悪魔を召喚できるアプリを自動的にダウンロードされた。私たちが利用していた悪魔召喚機より高性能で、我々も今普及の最中だ」

「そうなんですか？」

「ああ。このアプリを確認したのが、実はついさっき、つまりこの大災害の後なんだ」

ある程度のレクチャーを終えると、迫は懐からとあるモノを取り出した。

黒色のスライド式携帯電話だった。それは、鳴上の所有物の一つだった。

「一応、君に返しておく。悪魔召喚アプリはまだ入れていないが、ジプスの特殊通信網に登録した。私やジプス関係者とは連絡が取れるようにしたから、いつでも連絡して貰っても構わない。……最も、こちらから連絡する方が多いと思うが。」

君が希望すれば少し時間がかかるが、悪魔召喚アプリを入れられる。どうする？」

「大丈夫です。俺にはペルソナがありますから」

そう言って、鳴上は携帯電話を受け取った。

「一つ、君に忠告をしておく」

東京タワーの周辺にある広場まで車で送った鳴上に、運転手の迫が言った。

「悪魔が大量に出現している場合、そこには大抵悪魔召喚アプリが暴走した携帯電話が有るはずだ。それを破壊すれば悪魔は出現しなくなるが、出現してしまった悪魔は消滅しない。

それと、これは私からの餞別だ」

車のトランクから、迫は布に包まれた棒のようなものを差し出した。

鳴上は不思議に思いながらその棒を受け取り、纏っている布を解いた。

布の中には、一本の日本刀のようなものがあった。

「迫さん、これは一体……」

「妖刀《村雨》のレプリカだ。本物の《村雨》ではないにしろ、悪魔にそれなりのダメージを与える」

「そんなもの、俺が貰っていいんですか？」

「構わん。この装備はジプスの戦闘員に支給されるものだが、生憎扱える者が刀の数より少ない。ハクジョウシとの戦いで、君が鉄パイプを刀のように扱っていたのを思い出してな。良ければと思ったのだが、どうだ？」

「いえ、助かります。ありがとうございます、迫さん」

「ああ。また夜に会おう」

そう言い残して、迫は車を発進させ、次の目的地へと向かった。と同時に、鳴上の携帯電話から可愛らしい女性の声が響いた。

『新着の死に顔動画がアップされたよー！』

携帯電話の画面にはウサミミの可愛らしい少女の映像が映し出された。胸元も大胆に開いており、かなりエロい格好をしている。

そこで鳴上は一ヶ月前に親友の陽介に誘われて二カイアに登録したことを思い出す。

その時は半信半疑で登録し、しかもこの瞬間までまともに起動していなかったので、アプリをインストールしていたのをすっかり忘れてしまっていた。しかし悪魔召喚アプリがインストールされていない。何故なんだろうと鳴上は考えながら着信したメールを開く。

そのメールには動画が添付されており、鳴上はなんとなく、その動画を再生した。

「?! なんだ、この動画っ」

そこに映し出されていたのはライブ会場だった。

よく見れば、映像に写っているライブ会場は一週間後に久慈川りせのライブが行われる場所だった。よくCMで流れているため、鳴上は覚えていた。

ライブ会場の真ん中には、一年前まで共に戦った仲間である久慈川りせがペルソナを召喚して、悪魔と戦っていた。

しかし久慈川のペルソナは情報収集とサポートに特化した非戦闘型のペルソナ。久慈川は後ろにいる誰かを守るように懸命に戦っていた。

だが、久慈川は悪魔の力の前でなすすべなく、無残に斬り殺されてしまった。

そして、斬り殺された久慈川の後ろに隠れていた帽子を被った二代前半ほどの男性も、無抵抗に雷の魔法でその身を焦がされ、死に絶えた。

「クッ！ この動画は、本物なのか?!」

死に顔動画、ニカイア。

初めてこの動画を受け取った鳴上は、この動画が現実に起こるものなのか、それともただのフェイクなのか正しい判断ができなかった。しかし鳴上は、その動画が本物であるかどうか深く考えずに、ただ走り出した。

大切な仲間を救うべく、ただひたすらに駆けていった。もう二度と、大切な人を失いたくない。そう強く思いながら。

FROM : Nic a e a  
SUBJECT : 死に顔@久慈川りせ

日曜日、都内某所にて死亡予定の久慈川りせの死に顔動画がニカイアサイトにUPされたよ！

「あーもー！　なんで私がこんな目にあつのよ!!」

二年前の夏に突然芸能活動休止を発表し、去年の始め頃より芸能活動を再開したアイドル・りせちーの愛称でお茶の間に知られている久慈川りせは自身のペルソナ《カンゼオン》を召喚し、戦っていた。

来週行われるライブ会場の下見にマネージャーと来たものの、数時間前に起こった地震でマネージャーと別れ離れになり、ここに来たらマネージャーに合えると思えば来たものの、そこへ悪魔を連れてきた男性が来てから、ずっと戦っていた。

相手は低級悪魔の《コボルト》や《ノッカー》、《アガシオン》だったが、それでも戦闘慣れしていない上に非戦闘型のペルソナを所有している久慈川だと、なすすべがない。

「いやーごめんごめんお嬢ちゃん。まさか携帯電話からあんな悪魔が出てくるなんて思わなかったよ」

「思わなかったよ、じゃないわよ！　なんで私だけが戦ってるのよ!!

アンタも戦いなさいよ!!」

「ムリムリー。だって俺、君みたいに悪魔呼べないし」

「これは悪魔じゃないわよ?!　ペルソナって何度言えばわかるの?!」

そんなやりとりをしながら、久慈川は相手をアナライズしてなんとか攻撃を避けている。

こんな時に先輩たちがいれば。

ここにその先輩たちが来る事はない。皆東京から遠く離れた稲羽市にいるはず。助けになんか、誰も来ない。

いや、違う。一人だけ、来る可能性がある。

久慈川の思い人であり、一つ年上の少年鳴上悠。でも、と久慈川は思っ。

幾ら鳴上でも、出来ることと出来ないことがある。久慈川がピンチの時に、助けに来ることなどありえない。幾ら鳴上でも不可能、非現実的だと。

それでも、彼女は願った。

彼が助けに来てくれることを。物語の王子様のように、颯爽と格好よく登場することを。

でも、それは妄想に過ぎない幻。

ノッカーの衝撃魔法《ザン》とアガシオンの雷撃魔法《ジオ》によって、久慈川のペルソナ《カンゼオン》が消滅した。

カンゼオンの消滅は、久慈川の精神が限界だということを表す。ペルソナは人の精神を具現化したモノであり、ペルソナ消滅＝精神の限界だ。

久慈川はその場に座り込んでしまった。幾ら頭で立てと足に命令しても、足に力が入ることはなかった。

『美味しそうなニンゲンだ。食いやすいように切り刻んでやる』

コボルトがその刀を振り上げた瞬間、その刀身に雷が落ちた。

雷が落ちた刀を持ったコボルトはそのまま黒い煙とともに消滅した。

まさか、と久慈川は周囲を見渡した。

ライブ会場の最後列に、人影が見えた。

久慈川の瞳に涙が溢れ出した。

その人影は、まさしく彼女が待ち焦がれていた鳴上悠、その人だった。

『なんだキサマは!!』ワレワレのシヨクジをジャマするな!!』

残りの悪魔が鳴上に標的を変更し、襲いかかった。  
鳴上は、その腕に持つ村正のレプリカの鞘を抜いた。

「はあああああつ!!」

銀色に輝くその刀身が、一体の悪魔を切り裂いた。悪魔は黒い煙と共に消え、等身は銀色に輝き続ける。

『な、なんだその刀は?!』

悪魔たちが一瞬、その刀と鳴上の力に吞まれた。

その隙を鳴上が逃す訳もなく、イザナギを召喚した。

イザナギの大剣がノッカーの体を切り裂き、鳴上の村雨がアガシオンの胴体を貫いた。

そうして、圧倒的な力で全ての悪魔を倒した鳴上は、ゆっくりと久慈川のもとへ歩み寄った。

その姿は、さながら白馬に乗った王子様。待ち焦がれた光景のはずなのに、あまりにも非現実的な展開に久慈川の頭の中でちょっとしたパニックが発生した。

「大丈夫か、りせ?」

彼女に手を差し伸べる鳴上。その手を久慈川は戸惑いながらも、握った。

「嘘……どうして、先輩が?」

「りせが困っているとき助けに来るのに、理由なんているのか?」

久慈川はそのまま、鳴上の胸に飛び込んだ。

まるで子供のように泣きじゃくりながら、鳴上の胸元で感情を爆発させた。

## Sunday

「いやー感動の再会シーンってところ悪いけど、これ、どういう状況？」

久慈川が泣きやんでそれなりに冷静を取り戻した時、久慈川に助けられた高級そうなスーツに帽子、眼鏡を掛けた二十代前半ほどの男性が鳴上に話しかけてきた。

「そついや自己紹介遅れちゃったね。俺は秋江讓《アキエユタカ》。周りからはジヨーって愛称で呼ばれてるよん」

「俺は鳴上悠。こっちは久慈川りせだ」

「おお！ あの有名なアイドルのみなみでしょ。いやーモノホンのアイドルに会えるなんて光栄だなあ」

「かなみはうちの事務所の後輩！ 私はりせちー!!」

「そつなの？ ま、どっちもアイドルだし、気にしない気にしない」

「気にするわよお……。先輩、私この人苦手……」

飄々と気の抜けた雰囲気ジヨー。この状況にも関わらず、不思議に冷静な態度を取るジヨーに不信感を覚える鳴上だが、それはジヨーの性格なのだろうと結論づけた。

「君たちのお陰で、あの悪魔？と契約できたみたいだし、これで僕も君たちみたいに一緒に戦えるね」

「一緒について、アンタ私たちに着いてくるの?!」

明らかに嫌そつな表情を見せる久慈川に対して、着いてくる気満々のジヨー。

「そりゃ、この状況で離れ離れになる理由もないし、仲間は多い方が心

強いでしょう？」

「それは、そうだけど……ねえ先輩、どうする？ この人超テキストだよ？」

「あーから。残念だなあ……ま、どうしてもっていつなら、ここでお別れするけど」

全然残念そうに見えないジョーだが、鳴上には特に断る理由もなかったのだ。

「……良いですよ。一緒に行動しましょう」

とあっさり仲間入りを決定した。

「良かったー。俺は君たちと会えて本当に運が良かったよ、ホント。

ま、これから先よろしくね」

右に鳴上の左手を、左に久慈川の右手を掴んで上下にブンブンと握手をするジョー。

そんなことをしていると、不意に鳴上の携帯の着信音が鳴った。

画面には《迫真琴》という文字が浮かんでいた。

「はい、もしもし」

『鳴上、今どこにいる？』

「霞ヶ関にあるライブ会場です」

『敵が現れたっ。目標は今、新橋のSL広場の方へ向かった。可能なら、そちらからも応援に向かってくれー！』

「わかりました。俺もすぐに向かいます」

『頼んだぞ』

と迫は少々強引に電話を切った。

「りせ、ジヨーさん、これから新橋に向かいますが、良いですか？」

「俺は構わないよ」

「私も問題ないけど、あれ？　なんで先輩のケータイが繋がってるの？」

「そついやそつだね。俺もこの地震の後、全く繋がらないんだよね」

「詳しい説明は移動しながら説明します。さあ、行きましょう」

「じじは、まさか……」

少女は、思わぬ光景に自身の目を疑う。

数年前に訪れたことのある現実世界とは懸け離れた精神と肉体の狭間の空間。

幾つもの時計が壁に飾られており、広いエレベーターをモチーフにした部屋だ。しかし、そこは以前と違い、エレベーターはまるで落下しているかのように景色が下へ、下へと流れて行く。

少女はその部屋を、ベルベットルームと呼んでいた。

「ようこそ、我がベルベットルームへ……」

不自然なほど長い鼻に、ギョロリと見開かれた目、ファンタジーの世界に登場するエルフのような尖った耳。

この部屋の主にして人形に過ぎない彼と出会ったのは、少女がワールドの能力に目覚めてからだだった。

2010年3月31日の繰り返す一日を脱出してからは、今の今まで願っても訪れることが出来なかったはずのこの部屋に、どうして来

れたのかと少女は疑問に思った。

「お久しぶりでございます、様」

銀色のショートカットに金色の瞳、白雪のように白い肌が特徴であるエリザベスだった。

「ようやく、全ての準備が整いました」

「なんの、準備、がですか？」

当たり前の疑問を、少女はエリザベスに投げかける。

エリザベスは嬉しそうに微笑を浮かべ、こう言った。

「囚われたあの人の心であり、精神であり、魂であるものでございます」

「あの人……」

「はい。私と、あなた様の大事な人である、様の囚われた魂の行方です。」

その魂を解放するための準備は、もう整っております」

エリザベスの言うことが少し理解できなかった少女に対して、エリザベスはこう言葉を続けた。

「彼の肉体は既に、私の手中にございます。残る魂を取り戻せば、」

「あの人と、もう一度会えるのでありますか？」

はい。とエリザベスは首を縦に振った。

「今晚0時前に、東京タワーまでお越しください。そこに来れば、あとはなにをすべきなのか、あなた様には分かるはずです」

不意に、少女の視界がボヤける。  
夢から覚めるように、意識が現実世界へと引っ張られる。

「あなた様の旅は、まだ途中です。行き着く先は天国か、あるいは地獄か……それとも無か。」

その答えは、あなたの選択次第でございます」

## Sunday

「白虎か……敵ながら良いサマナーだ」

太陽が完全に沈み、普段ならば街灯やビルで明るい新橋も、あの大災害で全て停電。町は完全に機能を停止していた。

その中で、峰津院大和率いるジプスが《セブテントリオン》の《ドウベ》と交戦している最中のことだった。

作戦は途中まで上手くいっていた。ジプスの構成員数名を犠牲にドウベを誘き出し、峰津院が所有する悪魔で止めを刺す予定だった。

しかし、その構成員が作戦遂行途中、白き獣の神聖獣、白虎を従える悪魔使いの少年によって彼らは救われた。

そのことにより作戦が失敗し、結果ドウベを見失ってしまった。そして白虎を従える少年もドウベを追い、その後の行方を知らない。

救われた構成員の話によれば、その白虎のサマナー以外にもう一人、銃火機を所有する少女がいるようだ。その少女は白虎でドウベと交戦する少年を援護するようにマシンガンやロケットランチャーなどで援護射撃をしていた、と。

それにより考えられるジプスの作戦を阻止した者の正体は二つ。

一つは自衛隊に所属していた元自衛官。武器はこの災害の混乱を利用して入手したと思われる。現在自衛隊はジプスの傘下に入っているため、その自衛隊がジプスの作戦を邪魔することはあり得ない。そのため、元自衛官が候補に挙がる。

二つ目は、黒い噂が絶えない日本に本社を置く、とある大財閥の組織。その組織では人型兵器の開発に成功したとの未確認の情報を得ていた。その人型兵器には銃火機が内蔵されているとの情報もある。

その少女が元自衛官だろうと、人型兵器だろうと峰津院には関係ない。

峰津院は邪魔をする者を全てなぎ払い、自分が求めている理想の世界を築くためには、どのような犠牲さえも問わない。

全てを破壊するまでだ。

日曜日 of 侵略者《ドウベ》。

キノコのような、大手菓子会社が販売しているチョコ菓子の某カブリコのような形をし、無駄にカラフルなそのフォルム。それが世界を蹂躪する侵略者であることを、一部の人間以外は、まだ気付いていない。

大量の魔力を圧縮させて、その魔力を瞬間的に放出及び爆発させ、周囲を焼き払う攻撃が特徴の侵略者。

ドウベの特筆すべき能力は、その攻撃ではなく、鉄壁とさえ言える防御力。

攻撃自体は攻撃範囲が狭く、近づかなければ問題はない。しかし、ドウベはある一定以上の破壊力を備えていない物理攻撃を無効化、炎氷雷衝撃魔術といった全ての魔法及びスキルを通さない体質。半端なサマナー及びペルソナ使いでは歯が立たない。

「先輩！ もう限界だよ！ 早く逃げないと、死んじゃうよ！」

そして、鳴上もその例外には当てはまらない。一年前ならばまた違ったのであろうが、今は違う。

イザナギ以外のペルソナを持たない鳴上と、《オーガ》や《コボルト》などの低級悪魔しか持たないジョー。後方のりせがドウベアナライズして得られる情報は、全て絶望に満ちた情報のみ。

今の自分たちでは、倒すどころか傷一つ付けられない。

「あらら。俺の悪魔はもう限界みたいだ。たぶん、次の一撃で消えちゃうかな」

「だから、早く逃げないと！ このままだと次の爆発でみんな死ぬじゃっ!!」

「だからと言ってここで逃げれば、また人が死ぬ」

鳴上達はドウベとこの新橋で遭遇した時、偶然にもドウベのあの攻撃を目の当たりにした。

ドウベのその姿に興味を示した一般人が近付いた瞬間、あの爆発が起き、十数人ほどの人間が既に灰と化した。

ドウベのキノコの傘のようなピンク色の円盤が膨張する。さながらレンジで作るポップコーンの袋が膨張するように、徐々に大きくなる。

その円盤が限界まで膨れ上がった瞬間、またあの爆発が発生する。

「だからって、なんで先輩が死ぬまで戦うの?! ジプスの命令だからって、なんでそこまで、」

「そうだよ鳴上くん。俺達は充分頑張った。だからとっととおさばらしないと、本当に死ぬじゃっよっ?」

「覚悟の上です。これ以上、誰かの大切な人を死なせたくない」

「先輩……もしかして菜々子ちゃんのこと……」

何かを決意した鳴上は、集中し直して村雨を構える。死をも懼れぬその視線の先には、破裂寸前のドウベがいた。

「りせ、ジョーさん。ここから逃げてください。これから先は、俺がやります」

一か八か、そんな賭けに鳴上は乗ろうとしていた。

「ま、年下の君にそんなカツコされちゃあ、俺だって逃げてられないよ。」

それに、命の恩人を置いて逃げるなんて、俺にはムリ」

絶体絶命。そんな状況だというのに、笑顔を絶やさないジョーが鳴上の隣に悪魔召喚アプリを起動させた携帯電話を構えて立つ。

「先輩、私も最後まで全力でサポートするよ。そしてまた、みんなに会おう！」

一年前と変わらないりせの心強いバックアップに、鳴上は思わず笑みがこぼれた。

災害発生から、一人で戦い続けたといっても過言ではない鳴上は、こんなにも仲間の存在が心を落ち着かせるものなんだと、改めて実感した。

「ありがとう、りせ、ジョーさん。必ず生きて、いついつを倒すぞ!!」

ペルソナ。そう言って鳴上はカードを握り砕く。

現れたペルソナはイザナギではない、別のペルソナだった。

正義のアルカナを司るゾロアスター教の天使であり、時には下級神として崇められるもの。

ペルソナ《スラオシャ》だった。

「前とは違うペルソナ、か」

峰津院は新橋のS.L広場を囲むようにジプスの構成員を配置させていた。

峰津院にとってドウベを倒すことなどいつでも出来る。しかし、こうして野放しにして鳴上をドウベに引き合わせたのは、二つの思惑があった。

一つ、先程の作戦の邪魔をした白虎使いをおびき寄せるためだった。その為隠密にジプス構成員を各地に配置させ、ドウベを逃がさぬよう細心の注意を払っていた。

「見ろ、迫。あのペルソナ使い、複数のペルソナを召喚できるようだ。これは期待できそうだ」

二つ、それは鳴上が信用たる人間で、そしてこれからの計画に使える人間かどうかのテストだった。

「あれは……まさかっ」

「そうだ。ゾロアスター教の天使《スラオシャ》。ペルソナは人の心を写す鏡だ。それで天使を呼び寄せたということは………実に都合が良い」

これでまた、理想の世界へと近づぐことが出来る。  
しかしそのためにも、その前に鳴上が侵略者《ドウグ》を倒さなければならぬ。

「きよ、局長！ 来ましたっ」

「どうした？ 端的に報告しろ」

通信役のジプス構成員が慌てた様子で峰津院に駆け寄ってきた。

「あ、現れました！ 十時の方向、白虎です!!」